

人迎氣口診の證が変わらないために主訴が前後する症例の考察

吉岡広記¹ 山田恵美¹

1) 吉岡鍼灸院

【目的】表題の症例について考察する。

【対象 A】38歳女性。会社員。清楚、色白、瘦人。初診 X 年4月7日。2年前に転職して以降、気温の上下が激しい時にギックリ腰(左)を患うようになった。10日前より左腰が痛みだし、徐々に悪化。当日は、左の踵のしびれ、右の腰下肢が痛み、踵と薬指・小指のしびれがあり、歩行に支障あり。それでも仕事(気を遣うことが多い)が多忙で休めず。脈證は気燥痰燥のやや順(氣口沈濇<人迎沈濇、数)。治療は週2回。16日に腰椎椎間板ヘルニアと診断。この頃には姿勢の制限や夜間痛が消え、5月下旬にはしびれ(右>左)が主となり、より多忙であった翌日に左臀部痛がでるのみとなる。以降、この状態が半年以上続く。

【対象 B】17歳男性。高校生。はにかみがちで鼻を頻繁にすする(幼少より鼻炎、目と鼻のチックあり)、色白、瘦人。初診 Y 年10月。校風が合わず9月頃から倦怠感、無気力、マイナス思考、イライラを強く感じだす。脈状は虚勞虚寒の逆(氣口浮濇<人迎浮濇、遅)。治療は週2回。5回目には軽い倦怠感や無気力のみとなる。以降、1年以上が経つが目や鼻の症状を含め前後して変わらない。

【対象 C】39歳男性。高校教員。色白、瘦人。初診 Z 年7月。数日前から日頃の首肩の凝りが強まり、右耳鳴、右側頭と右手母指・次指のしびれと強ばりがでる。学校で問題が起き、今後も続くとのこと。脈状は虚燥風燥の逆(氣口浮濇<人迎浮濇、数)。治療は週2回。強ばりや首肩の強い凝りは早期に消えたが、そのほかは1年以上経ても前後している。

【考察】A は数脈もさることながら、人迎が滑脈となること、BC は人迎が沈脈となることと鍵となるが、證が変わらないのは、根底に環境による継続的な消耗がもたらす陰虚があることによる。

【結語】発症理由が複雑かつ継続的であれば、当該の症状が急性であっても容易には回復せず慢性化する。さらに肥瘦と脈状の関係が逆の場合は悪化が想定される(第67回学術大会にて報告)。また同じ證の継続が別の病を併発する可能性もある。

人迎氣口診の證が変わらないにも関わらず主訴が改善する症例の考察

山田恵美¹ 吉岡広記¹

1) 吉岡鍼灸院

【目的】吉岡報告と逆の症例を考察する。

【対象 D】19歳男性。大学生。声高く、色白、肥人。腰椎椎間板ヘルニアの既往あり。初診 W 年8月。朝の起床時に急性腰痛(左)を発症。動くことができず夕方に往診。冷房が強く室内は寒かったが、本人はちょうどよい。日頃から暑がりであり飲み物には必ず氷を入れ、当日も枕元に置かれていた。自汗し、額と左腰が目立つ。小便不利。脈證は気虚寒湿の順(氣口沈滑<人迎沈滑、遅)。1度でほぼ全快。

【対象 E】64歳女性。小学校教員。声高く、色白、瘦人。初診 X 年11月1日。前日、テニス中に左腰を痛める。立位と座位が困難。便通なし。脈證は虚燥痰燥の逆(氣口浮濇<人迎沈濇、数)。連日治療し、3日目に便通があり、5日目の昼には全快。

【対象 F】62歳男性。会社役員。声太く、色白、面と鼻が赤らむ、肥人。初診 Y 年6月13日。1週間ほど前より、右肩から背中が痛みだす。動作時痛はなく、長い立位や座位で悪化。夜間痛あり。数日間、慣れない PC 作業をする。脈證は気燥痰燥の順(氣口沈濇<人迎沈滑、数)。2日おきに治療し、3回目には夜間痛が消え、4回目には全快。

【対象 G】43歳男性。会社員。声高く、色白、肥人。初診 Z 年3月9日。2月24日の朝、右腰臀部の激痛で目覚める。画像診断は異常なし。長い立位、歩行が困難、夜間痛のため1時間おきに覚醒。発症の2ヶ月前から2日前まで上歯を治療。脈證は気燥痰燥の順。治療は週5回とし、3週間目には夜間痛が消え、4週間後には全快。

【考察】D と吉岡報告の A は同じ既往があるものの、発症の理由や遅数の違いが改善の速度に反映されている。なお、数脈を呈する EFG には、容易には改善しない何らかの慢性的な症状もあり、それらは急性症状よりも陰虚の進行度に左右されている。

【結語】当該の症状が、急性であり、発症理由が単純かつ短期的であれば、證が変わらなくとも早期に回復する。ただし、肥瘦と脈状の関係が逆の場合はその限りではない(第67回学術大会にて報告)。